

松浦恆雄

解題：新中国『禁演』五十年史略論

傅謹氏の禁演をテーマにした最も早い論文は、「近五十年の禁戯」（『二十一世紀』1999年4月号）であろう。ただ、この論文は五頁足らずの短文で、建国後と民国期の禁演状況の概略を記しただけのものである。氏はこの後すぐ、大幅に資料を付け加えた同テーマの論文を新たに書き直している。その長篇論文が「中国：“禁戯”五十年」（『小説家』1999年第3期）である。この論文は、『二十世紀中国戯劇導論』（中国社会科学出版社、2004年12月）に収録される際、「近50年“禁戯”略論」（邦訳「新中国『禁演』五十年史略論」）と改題され、修訂を施された。修訂は、「五十年代」を「20世紀50年代」に変更するなどの技術的な修訂が多いが、最大で10行以上にも及ぶ比較的大きな省略が四箇所に見える。ただし、論旨を明晰にするための省略と思しい。

本論文は、『二十世紀中国戯劇の現代性と本土性』（国家出版社、2005年4月）にも収録されるが、この間のテキストの異同は認められない。今回の翻訳は『二十世紀中国戯劇の現代性と本土性』に拠った。

さて、20世紀を通じて、中国演劇最大のテーマは、戯曲改革であろう。しかし、1949年の建国を境にして、その前後で大きな質的变化が生じていることに留意せねばならない。建国前は、民間の演劇団体による、観客の認知を得ながらの改革が中心となって進められたのに対し、建国後は、国家組織による、イデオロギーのみで観客の認知を経ない改革、つまりいわゆる「戯改」だけが推進された点である。ゆえに建国後の演劇史の諸問題は、ほとんど全てが「戯改」と切り離せない。禁演問題もしかりである。

ここで傅謹氏の中国演劇研究の基本姿勢を確認しておきたい。氏の言を借りれば、氏の演劇研究者としての立ち位置は「保守主義者」である¹⁾。氏が保守主義に立つ理由は明確だ。「文化は伝統の不断の延長上に作られる」。ゆえに「模倣と繰り返しがなければ延長もなく、よって事実上、発展もない」²⁾からである。

こうした氏の研究姿勢がかたちづくられる上で、決定的な役割を果たしたのは、おそらく1994年から八年の

長きにわたって、浙江の片田舎をどさまわりしている民間劇団を、フィールドワークして得た経験であろう³⁾。氏は、建国後の「戯改」によって根本的に解体させられたと考えられていた、何百年となく受け継がれてきた民間劇団の上演方式や生存環境が、文革後の郷村社会に不死鳥のように蘇っているのを目の当たりにする。ちょうど村人たちの寺廟の神々に対する敬虔な信仰心の回復とともに⁴⁾。傅謹氏は、この体験を通して、中国演劇の繁栄、発展に何が真に必要なかが骨身にしみたに違いない。このような観点に立つ傅謹氏が、建国後の禁演五十年史を振り返り、そこに見える問題点を指摘、整理したのが本論文なのである。以下に本論文のさわりをご紹介します。

建国後、全国各地で「戯改」が展開される。その進展につれ深刻さを増していったのが、戯曲の伝統演目に対する禁演処分であった。「戯改」の目標の一つに上演演目の改良が含まれるため、新中国にふさわしくない演目を禁演処分とするのは当然のことであった。そこで、全国各地の地方政府は、大量の伝統演目を遠慮会釈なく禁演処分に付していった。「戯改」を指導する立場にある文化部は、あまりにおびた数だけの伝統演目が禁演処分とされるのに危機感を募らせ、26演目に限って禁演とすることを全国に通知する。しかし、地方も「戯改」の正当性を巧みに利用する。直接禁演にせずとも、内容の改良を待って上演を許可するという扱いにし、結局、改良に手をつけずに放置することで、どんどん実質的な禁演演目を増やしていった。国家の方針である「戯改」を積極的に進めることが、地方政府の政治資本となることは言うまでもない。このようにして、劇団は上演できる伝統演目がほとんどなくなり、観客は離れ、劇団は経営難に苦しむ。「戯改」が要求する新編の現代劇などは、観客がつかず、上演演目の増加、劇団経営の好転には全く繋がらなかった。

1957年、文化部は、ついに禁演26演目の全てを解禁するという一大決断を下す。全国二十数万人におよぶ戯曲関係者を見殺しにはできないからであった。事態はこ

1) 「向“創新”潑一瓢冷水——一個保守主義者的自言自語」、『二十世紀中国戯劇導論』中国社会科学出版社、2004年、所収。

2) 同上、476頁。

3) 傅謹氏はこの調査結果を好著『草根的力量——台州戯班の田野調査与研究』（広西人民出版社、2001年）にまとめておられる。

4) 「「路頭戯」的感性閲読」、「感受草根階層的精神脈動」（『二十世紀中国戯劇導論』所収）など参照。

こまで逼迫していた。

さて、この後の展開がどうなるかは、本論文をお読みいただきたい。二転三転のどんでん返しが待ち受けている。

結論的に言えば、新中国「禁演」五十年史は、禁演により戯曲の伝統を喪失し続けた五十年であった。目下、筆者が最も気がかりなのは、奇跡的に蘇りつつある民間劇団の伝統が、今なお健在であるか否かである。傅謹氏

が好んで引用する、不世出の武生・蓋叫天の次男、張二鵬氏の語を、筆者も最後に引用して本解題を締め括りたい。

「創新は何とたやすいことか。身体に芸のない人間ほど創新が得意で、創新のほかに何もできないのだ。一日中創新だ、改革だと叫んでいるが、思うにそれは、芝居の屠殺（原文「宰割」は「改革」に音が近い）である」⁵⁾。

5) 注1)、470頁。